



「実社会との接点を重視した課題解決型学習 プログラムに係る実践研究」成果発表会 —「防災プロジェクト」の場合—

静岡県教育委員会・静岡県立浜松江之島高校

公民科 増本 真也



本校の研究主題 & R3年度 実践の概要

〈研究主題〉

- 持続可能な社会づくりに貢献する公民的資質の育成を図ること

R3年度 実践の特徴

- 学習目標・内容・方法に持続可能性の観点を取り入れ、地域課題の解決策を提案する。
- 『公共』の大項目Cを想定し、11時間の単元を開発。大項目Aの概念を活用 & 持続性を問う5観点を開発
- 地域課題は「浜松市南区と防災」→生徒の関心に即して7ジャンルから一つ選び、探究テーマを設定
- ルーブリック作成による評価
- 商業科との連携（SDGsや企業倫理の理解）
- 静岡大学と連携し、防災学習プログラムの開発→R4 実践に活用

成果

- 「持続性を問う5観点」による策の改善ができた生徒＝93%
- 事後レポートにて、課題解決に向け地域貢献に関する具体的記述をした生徒は78%に達した（課題認識の深まり）
- 『公共』を想定した概念活用型の探究学習のモデル化
→他地域でも、防災以外のテーマで単元開発・実践が可能

課題

- ▲ 事後アンケートで、「地域の課題解決に取り組みたいと考えているか？」の問いに「よく考えている」と答えた生徒は、23%
- ⇒主体的態度の面では、社会参加意欲の向上に十分結びつかず

いかにして、社会参加・地域貢献の意欲や、課題を自分事と捉える責任感といった主体的態度を涵養できるか？



R4研究テーマ：探究型学習を通じた主体的態度の形成はいかにして可能？

結論：地域の課題を「自分と関わりがあることだ」と捉える意識（責任感）を土台として、「自分はこの課題解決に貢献できるんだ」という生徒の**自信**を引き出す。この両意識を育む単元・教材開発や指導法の導入が必要。

参照するのは「**自己効力感**」（Bandura,A ‘Self-efficacy’ 1997など）



達成をもたらすような一連の行動を実行する能力に対する信念

●自己効力感を向上させる5つの要因（情報源）と活用の視点（筆者作成）

	1、成功体験	2、代理的経験	3、社会的説得	4、情動的喚起	5、自己調整過程
説明	過去に困難な目標を達成した経験があること。この直接的経験が最も効果的	「あの人ができるのなら、自分にもできるはず」と、身近な他者の行動・成功を観察して自信を高めること	他者から「あなたならできる」と励まし・承認の言葉やフィードバックをもらい、自信がつくこと	生理・精神的な状態の良し悪しによって、達成できるかどうかの認知や心理が変わること	目標や取り組む過程の選択権が自分にあり、自ら調整し実行していると感じること (Schunk,2001など)
活用の視点	●地域や行政の方との直接的な交流 & 学習成果の発表 ●中間発表会の実施など、疑似的な体験でも有意義	●昨年度の取り組みや、先行して連携した班の交流・発表成果（良かった点）を他班や他クラスに共有し、そのモデルを示す	●作業・準備段階で担当教員等が生徒にプラスの声かけ ●連携先の方々から発表に対するコメントを積極的に貰う	●策の提案・発表に向けた見通しや連携先の情報、連携時の留意点などを示し、学習上の不安や焦りを緩和してあげる	●探究テーマや調査の問いの設定、策の提案や成果物の作り方まで、原則として生徒たちが自ら選び、考え、実行するよう支援する

実社会と関わることの意義 & 単元開発の視点

■ 実社会（地域の方々）と直接的に関わり、発表・発信する意義

- 地域の方の目線に立ち、ニーズ・困り事が何かを調べ、どんな解決策が必要かを考える & どうやって伝えれば理解してもらえるかを工夫する → 自分事として考える
- 自らが作った成果物に対する反応がありコメントがもらえる → 自己効力感の向上に

⇒（校内での提案・発表にとどまらず）**地域の方と直接的につながり、学習成果の発表・発信を行うことを通して、地域の課題を自分ごとにし効力感を高めることが、主体的態度を形成する上で重要**

★ 実社会と関わる機会が、主体的態度の形成につながるための単元開発の3つの視点...

- ① 生徒の関心や切実な問題意識に根付き、探究テーマを自ら設定すること
- ② 策の批判的検討を通して、現実・持続可能性を高めること（概念の活用）
- ③ 地域の実態を調査し、地域の目線・立場を想定した伝え方を工夫すること

→ その実現のため、公民科授業だけでなく他教科や外部との連携が重要に



単元計画と実社会との連携、商業科との連携

- 対象生徒：本校3年生（芸術科27名、普通科175名） 授業時数：計14時間
- 単元を貫く問い「**浜松市南区で地震・津波の被害を最小限にし、地域に貢献するためには？**」

概要	導入・テーマ・調査(7月)	提案・相互評価(9月)	再提案・制作(10・11月)	発表・発信(11・12月)
特徴	地域課題の概要理解／課題の設定(2h) 課題の調査・分析(2h)	解決策の提案(2h) 中間発表・相互評価会(1h)	解決策の修正・再提案(1h) 作品・成果物の制作(3h)	地域での発表・交流・発信(2h) レポート作成・まとめ(1h)
連携	防災学習センター見学 情報処理「防災×SDGs」	情報処理「スライド作り方」	区役所 防災地図等作成 講演 ビジネス基礎「企業」	市役所、区役所、福祉施設、 小・中学校、自治会など

特徴①探究テーマを班ごと話し合い自ら設定し、調査を行う
②地域課題の発見を促すため、ICTを活用した基礎資料の共有
③課題意識を言語化するための概念(幸福・公正等)の活用

特徴①「持続性を問う5観点」を用いて策を批判的に検討する
②テーマに応じた連携先を決定→発信する相手に理解してもらえる策の内容や伝え方を工夫
③学年で相互評価会を実施

特徴①相互評価会での他班からの意見をもとに、策の修正(追加調査、伝え方の改善等)
②学校貸出のPC・iPadを活用し、地域の方に発表・発信するための成果物・作品の制作

特徴①実社会との連携のタイミングは班ごと異なる→連携先からのコメントや取組みの良かった点等を他班に積極的に共有
②単元を貫く問いに対する自分の考えや変化をレポート記述



単元の導入にて防災学習センターを訪問し、体験型の学習&講話をいただく



- Google スライドやドキュメントをドライブで共有→他班の発表資料作成の方法を参考にできる&担当教員もすぐ確認可能
- Googleドライブ上に、防災の基礎資料となる地図や各データのPDF等を保管し、すぐ誰でもアクセスできる(時間短縮)
- Googleスプレッドシートに、行政資料ウェブサイトへのリンク一覧を提示し共有



相互評価会で発表・発信の練習&他班から評価(実現性・貢献度・魅力度の3観点でA・B・C)と改善のコメントを貰う

実社会との連携事例①

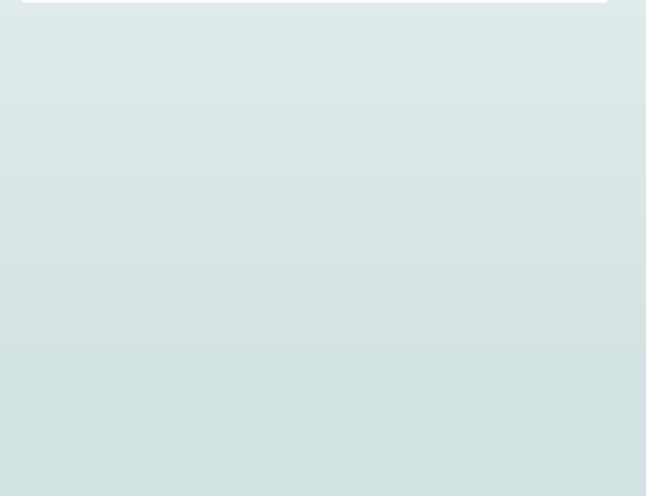
- 202名の生徒は、「外国人」「まち・施設」「心理・情報」「子ども・教育」「共助・訓練」「避難所生活」の6ジャンルから一つ選び、班ごとに探究テーマを話し合い設定。
- →決めたテーマに即して、「学校周辺の自治体・住民」「幼・小・中学校」「浜松市・南区役所」「福祉・介護施設」「動物病院・ペットショップ」などの連携先を選び決定。
計67班がそれぞれ、実社会と直接的につながり発信・発表を行った。連携する地域の方に
応じた防災の提案（成果物）の内容や伝え方を工夫して準備し、意欲的に取り組んだ。

南区五島地区自治会との連携事例



▲11/16 五島地区自治会打合せ 代表生徒が、回覧板に
載せるチラシ・ポスターを区長に事前発表・講評

近隣幼稚園との連携事例



▲11/15 あすなる幼稚園にて防災交流会
○×クイズで楽しく防災を学ぶ

近隣小学校との連携事例



▲12/1.2 南の星小学校にて防災学習・交流会
スライドを用いて対話しながら防災クイズ

実社会との連携事例②

近隣中学校との連携事例



▲12/2 江南中学校で防災学習交流会。
身近なもので避難所生活グッズの作成体験

近隣社会福祉施設との連携事例



▲12/20 遠浜会、障がい者の生活施設「ぷらねっと」で、避難所での障害・高齢者の生活をよりよくするための発表・交流会
生徒自作の段ボールベッドで快適さを確認



簡易テントで避難所生活のプライバシーを確保できるか体験・検証

浜松市危機管理課との連携事例



▲11/25 浜松市役所にて危機管理課担当者に
防災の提案・発表会

南区役所との連携事例



▲12/13 本校にて南区役所 防災担当者に対して
防災の提案・発表会

市企画課・行政担当者との連携事例



最終審査会
(<https://www.youtube.com/watch?v=Ea4DWUKzZUo>)

▲11/12 浜松市政策アイデアコンテスト2022
に出場。市長と意見を交わす生徒



本研究の評価方法


- 本単元での評価方法は3つ。特に②・③をもとに、本研究の成果と課題を明らかにする。

- ① 各段階で生徒の取り組み・記述内容を形成的に評価し学習改善につなげるルーブリックの作成・活用
- ② 最終的に提案した解決策（レポート）および成果物を総括的に評価するルーブリックの作成・活用
- ③ 地域への参加意欲や主体性の変容を見取るための事前・中間・事後アンケート（質問紙法）の実施

- 以下は②総括的評価で作成したルーブリック

評価観点・基準	素晴らしい (A)	よい (B)	改善が必要 (C)
前時の調査内容を踏まえ、客観的な論拠に基づいた策を複数提示しているか（知識・技能）	前時に調査した防災に関する現状・背景の情報を十分に活用し、具体的なデータ等を複数組み合わせ用いて、策の論拠を説得力ある形で提示している。	前時に調査した防災に関する現状・背景の情報を活用し、策の論拠を具体的に示している。	前時の調査内容を論拠として活用できていない、または前時に十分な調査ができていない。
取り組むテーマの背景や課題点などを、幸福/自由/公正/効率などの概念を用いて適切に説明しているか（思考・判断・表現力）	テーマの背景・課題点などを、概念を複数組み合わせ用いて多角的に考察・分析し、かつ説得力ある形でそれを表現している。	テーマの背景・課題点などを、概念を適切に用いて考察・分析し、それを適切に表現している。	テーマの背景・課題点などを、概念を用いて考察しようとして、文章等で表現できていない。
策の現実/持続性を、5観点をを用いてグループ内で検討し、その修正を図っているか（思考・判断・表現力）	策の現実/持続性を高めるために、5観点を複数組み合わせ用いて多角的に検討し、策の改善・改良がされている。	策の現実/持続性を高めるために、5観点をを用いて検討し、策の修正が図られている。	5観点をを用いた策の修正ができず、自らの策の見直しできていない（現実/持続性が高まっていない）。
地域の課題解決のために、地域の方々の目線に立ち、貢献できる策を考えようとしているか（主体性）	地域の課題解決のため、地域の方々の目線に立って必要な策を深く検討し、地域に自ら参画し貢献できることを考えている。	地域の課題解決のため、地域に必要な策を検討し、地域のために貢献できることを考えている。	地域の課題を自分とは関係のないことと捉え、貢献できる策を考えていない。

- 以下は、③の中間アンケート



私たちの防災プロジェクト 中間アンケート

HRNO _____ 名前 _____

★①～③の質問に対してあなたの回答をしてください。

①あなたが防災プロジェクトをやって、新たに知った・考えた・感じたことは何ですか？（具体的に）

②「防災（災害）」という南区の抱える課題について、自分に関わりがあるものと考えていますか？

【 よく考えている / やや考えている / あまり考えていない / 全く考えていない 】

➤具体的に、南区の防災（災害）の課題と自分自身はどのような形で関わりがある、自分ごとと考えていますか？

③今・将来のあなたは、防災・減災という地域の方々の課題解決や改善に貢献している・できると思う？

【 よく思っている / やや思っている / あまり思っていない / 全く思っていない 】

➤具体的に何ができている/いると思うか？ 今・将来あなたのできる行動を書いてください。

生徒に学習の見通しを立てさせるため

- 各段階の評価基準（ルーブリック）を生徒に事前に示す
- 形成的に評価した対象にコメントを付けて（付箋）生徒にフィードバックする
- レポートの書き方の見本（A評価の一例）を示すなどの工夫を行った。

成果①（思考力や提案力の評価結果）

■ 総括的評価で作成したルーブリックの一部

観点①

②

評価観点・基準	素晴らしい (A)	よい (B)	改善が必要 (C)
取り組むテーマの背景や課題点などを、幸福/自由/公正/効率などの概念を用いて適切に説明しているか (思考・判断・表現力)	テーマの背景・課題点などを、概念を複数組み合わせ用いて多角的に考察・分析し、かつ説得力ある形でそれを表現している。	テーマの背景・課題点などを、概念を適切に用いて考察・分析し、それを適切に表現している。	テーマの背景・課題点などを、概念を用いて考察しようとせず、文章等で表現できていない。
策の現実/持続性を、5観点をを用いてグループ内で検討し、その修正を図っているか (思考・判断・表現力)	策の現実/持続性を高めるために、5観点を複数組み合わせ用いて多角的に検討をし、策の改善・改良がされている。	策の現実/持続性を高めるために、5観点をを用いて検討をし、策の修正が図られている。	5観点をを用いた策の修正ができず、自らの策の見直しできていない (現実/持続性が高まっていない)。

▼ 持続性を問う5観点 (JICA、OECD-DAC事業評価をもとに作成)

分析度	状況分析が十分で、情報が揃い、根本的な解決策かを評価 問い「その策が根本的な解決になる？情報・分析は不足していない？」
継続性	提案の予算や手続き、担う団体・機関の妥当性を評価 問い「その維持費はどれだけ？管理・運営を担うのはどの機関？」
魅力度	提案の独自性や興味深さ、他者(社)に訴えるかを評価 問い「人々に伝わる魅力・アピールはある？商業的なニーズは？」
リスク	提案を導入する影響・デメリットを考慮したかを評価 問い「導入するとどんな影響が？他者や環境にどんなリスクが？」
実現性	政策の実現可能性や今後のビジョン・見通しを評価 問い「それで具体的に何がしたい？その策の今後の見通しは？」

観点① 評価「A」の生徒レポートより一例

探究テーマ：浜松市の外国人の方々は、災害時に避難所での食事をどうすべき？
設定の背景：浜松市に多い外国の方は、宗教上の理由や言語の問題で私たちよりも災害時に不自由を感じる人が多いと思ったから。災害時に、外国の方も日本人と同じく公平に扱われ生活でき、生きのびられるよう、私たちにどんな準備ができるか興味があったから。外国人向けの非常食を用意することで、効率的な支給ができると思ったから。



観点② 評価「A」の生徒レポートより一例

探究テーマ：高い津波が予想される地域の方に「避難しよう」と思って貰うためには？
5観点的活用：逃げなくても大丈夫と思っている人に津波の危険性を実感してもらうために、実験動画や色付きマップを発表内容に取り入れ、言葉だけよりも注目してもらえるように工夫しました (魅力度)。また、緊急避難場所と避難所の違いをスライドで明確に示し理解してもらうことで、いざ避難が必要になった時にその2つを混同させず正しい行動がとれるようにしました (実現性)。



観点①の評価結果 (202名)
A=76名、B=114名、C=12名

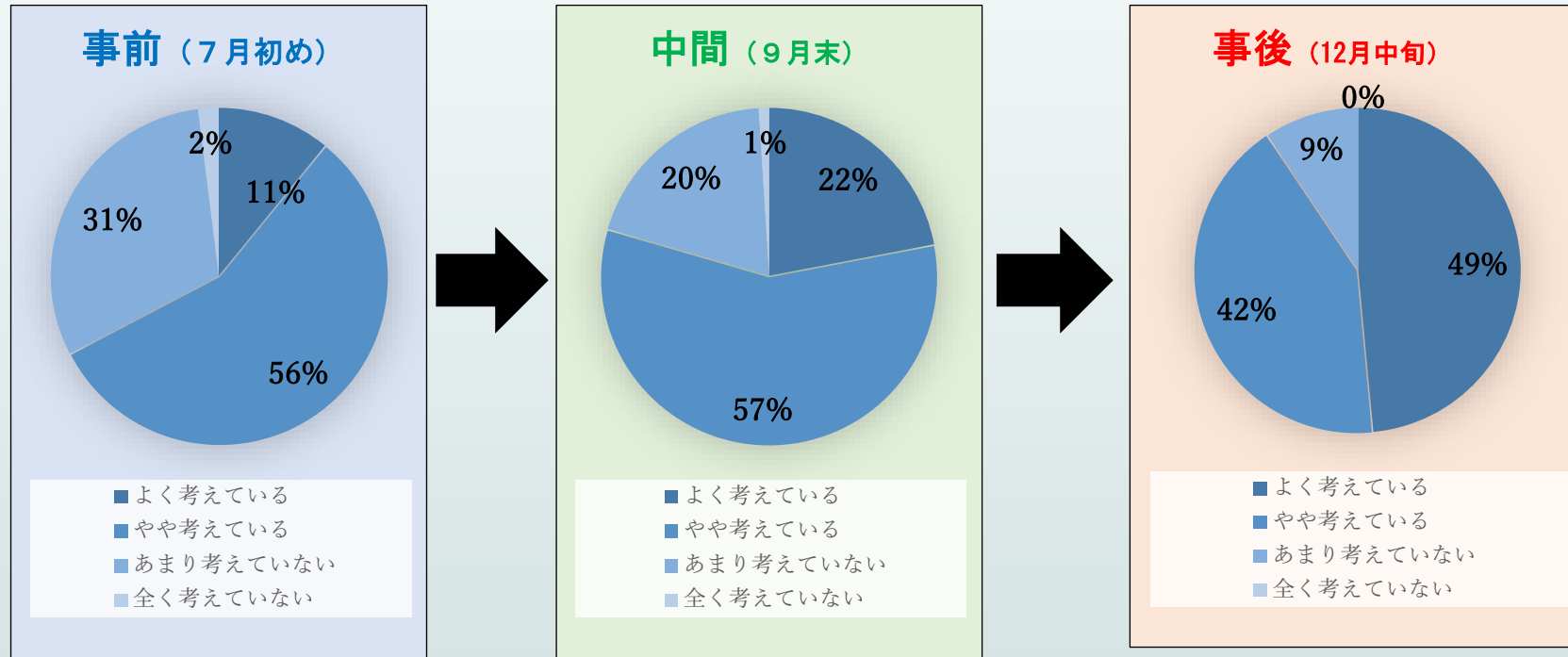
観点②の評価結果 (同上)
A=65名、B=108名、C=29名

▲全体の94%の生徒が、最終的には概念を活用してテーマ設定の背景を説明できた。
 また、85%の生徒が、持続性を問う5観点をを用いて解決策の改善を行うことができた。

本研究の成果②（主体的態度「自分との関わり」の評価結果）

- アンケート（質問紙）の問い：南区の「防災」の課題を、自分に関わりがあると考えている？

対象生徒：202名




- 自分によく関わりがあると認識する生徒は、最初は1割だったが、最終的には約半数に増加（「やや」も含めると9割に到達）
- あまり/まったく関わりがないと認識する生徒は、最初は1/3いたが、最終的には1割以下に減少
⇒実社会と関わった前後で大きな意識変化


★中間→事後で、76名がプラスの変化。124名が変化なし。2名がマイナスの変化

本研究の成果②（主体的態度「自分との関わり」の評価結果）


【記述内容が多かった例とその背景】 ※カッコ内：中間→事後で回答した選択肢（の変化）

- 
- 自分は生まれも育ちも南区なので、小さい頃から災害には警戒しなさいと言われて育ってきました。ただ、課題があるということは、このプロジェクトをやるまで自分も知らなかった、気づかなかったので、その課題解決に向けて手助けできることがあればやっていきたいと思います。（あまり→よく）
 - 防災について自分なりの考え方を持っていたが、今回やってみて考え方が変わった。実際に町を調査してみて、知らなかった危険に新たに気づくことができた。（あまり→やや）

テーマに沿って調査する中で、課題を自ら発見し問題意識が高まる→自分ごとに変化

- 
- 自分で防災について調べ解決策を実際に作ることで、知識だけでなく課題解決のために考える機会になった。5観点や概念を通して、違った方向から防災について考えることも必要だと思った。（やや→よく）
 - プロジェクトをやって思ったのは、思っているだけでなく行動することが大事であり、行動するには「リスク」や「実現性」などの考え方が大切になってくると実感した。これからは持続性の考え方を使って取り組んでいきたい（あまり→やや）

5観点や概念を活用することで地域課題の解決策を考えることができた
→自信が付き主体性の向上

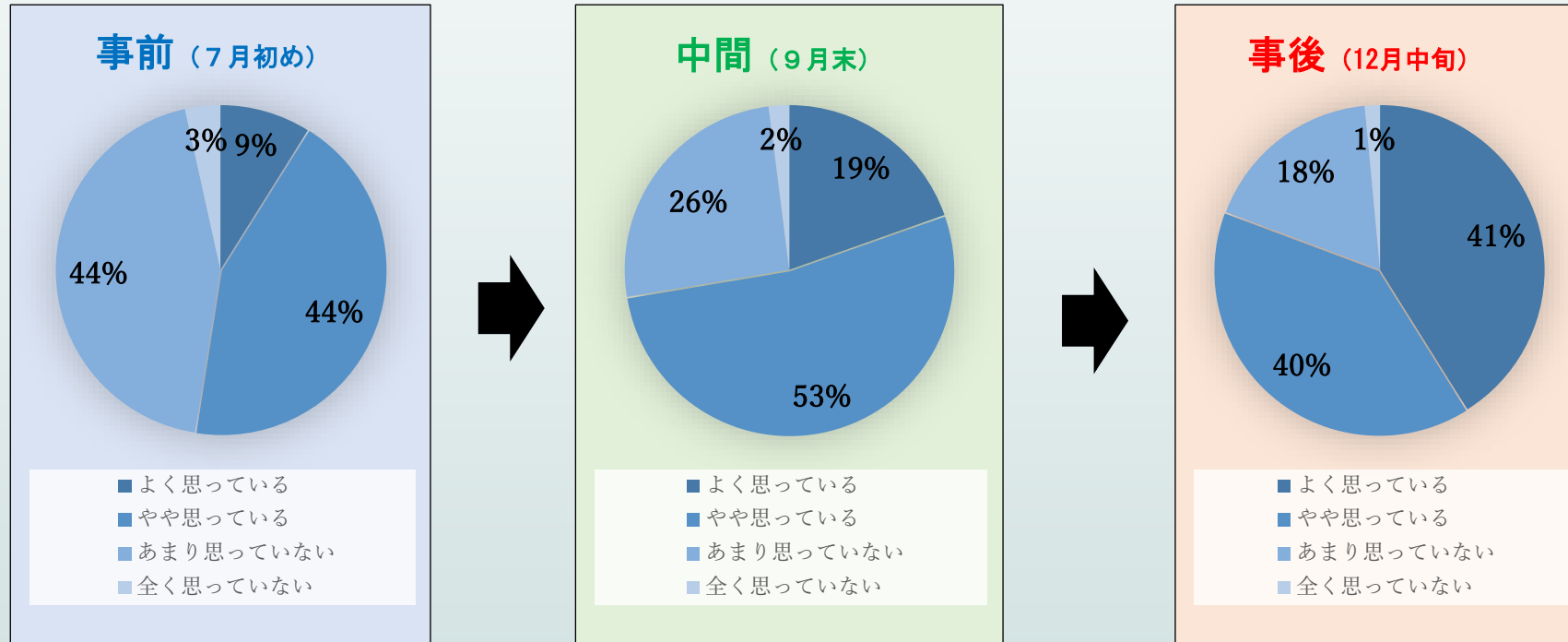
- 
- 幼稚園の頃から訓練をしたり講座を受けたりしているが、防災プロジェクトで今までで一番深く考えた。他の人の災害に対する不安を減らしたいという思いでリーフレットを作ったが、それにより自分の不安もなくなった。（あまり→よく）
 - 自分は中区に住んでいて防災は関わりがないと思っていたのですが、このプロジェクトで子どもたちにどう防災の知識を伝えられるかを考えるうちに、自分にも関わりがあると思うようになった。（あまり→やや）

地域の他者の課題解決に向けて考え準備するうちに、自分事へ変化

本研究の成果③（主体的態度「地域への貢献」の評価結果）

- アンケートの問い：今・将来、地域の方々の「防災」という課題解決に貢献したい・できると思う？

対象生徒：202名



○強く貢献したいと思う生徒は、最初は1割未満だったが、最終的には4割に増加
(「やや」も含めると8割に到達)

○あまり/まったく貢献したくないと思う生徒は、最初は約半数いたが、最終的には2割以下に減少
⇒実社会と関わった前後で大きな意識変化

★中間→事後で、67名がプラスの変化。127名が変化なし。8名がマイナスの変化

本研究の成果③（主体的態度「地域への貢献」の評価結果）

【記述内容が多かった例とその背景】 ※カッコ内：中間→事後で回答した選択肢（の変化）



- 自分は今まで受ける側だったけど、今回発信する側になって、より防災の考え方が深くなった。「なぜそれが必要か、なぜそうなるのか」を考えて伝えないと理解してもらえないので、その部分を考えることができた。（よく→よく）
- プロジェクトを開始するまで、どうやって情報を伝達すればいいか分からなかった。やっていく中で、その地域の人の目線になって考えることで伝え方が分かり、また防災のことを自分自身も身近に知ることができた。（あまり→よく）

地域の方に発信するためにその
目線に立ち伝え方や内容を工夫
→考えが深まり自信へ



- 実際に中学生と交流して、自分たちが頑張って作成したものを中学生が真剣に聞いてくれたり、一生懸命考えて体験学習に取り組んでいるのが分かって、すごく嬉しかった。自分も避難したら、地域の方の少しでも役に立ちたい。（やや→よく）
- 地域の方と関わった時に、自分たちが防災に取り組んでいることを喜んでいました。地域の方も、高校生と関わったのが良かったと感じます。将来は今回学んだことをいろんな人に語り継ぎ、防災のボランティアをやります（あまり→やや）

実社会と関わった際にプラスの
反応があり嬉しい/達成感があった
→「社会的説得」で自己効力感の向上へ



- 大学に進学してこの地を離れても、このプロジェクトで学んだやり方を生かし、その地域の課題を知り、新たな課題について考えていきたいと思っています。（やや→やや）
- 今までは避難訓練も自分たち中心だったから、外国人などにどうやって正しい知識を伝えられるか、と違う目線で考えることはすごく難しかった。もし地震がいま起きたら、このプロジェクトで身に付けた知識が生かせると思った（やや→よく）

プロジェクトで学習したことを
将来や他地域でも活用し、
課題解決に取り組みたいという声

その他、アンケート記述から分かる成果と課題

【成果として理解できるもの】



防災プロジェクトに取り組んできて、クラスの人たちが真剣に取り組んでいるのを見ていて、本当に自分事として考えているのが分かった。そして真剣なクラスの人たちに感化されて、僕も自分事として考えるようになり、自分のような若い世代が災害から地域の人々を守る努力をしていきたい。（「自分との関わり」 やや→よく / 「地域に貢献」 あまり→よく）

自己効力感を高める要因「代理的経験」(Bandura)のような、**集団として主体的態度を育んだ例**



地域の方に発表するため、どうしたら私たちが考えた策の必要性を理解してもらえるかを考えているうちに、「もし自分だったらどうする？」と自分ごととして積極的に防災に取り組むようになっていた。（「自分との関わり」 あまり→よく / 「地域に貢献」 やや→よく）

地域の方の目線に立って考える過程で、防災を自分ごととして考えるように



このプロジェクトを多くの人に知ってもらうことが大切だと考える。今の時代はSNSを使って簡単に広められるので、自分たちの提案を発信したいと感じた。実際に中学校へ行って発表した時、とても有意義な時間だったと感じる。（「自分との関わり」 やや→よく / 「地域に貢献」 よく→よく）

防災プロジェクトのような**探究型学習に意義や可能性を感じ、取り組みが広がることを期待する声**



私たちは、遊びと学びを両立できるように防災カルタを作りました。一緒にやったら楽しみながら防災について学んでくれることが分かりました。もっと防災カルタが広まって町全体の防災への意識が向上すると思いました。（「自分との関わり」 やや→よく / 「地域に貢献」 あまり→よく）

その他、アンケート記述から分かる成果と課題

【課題として理解できるもの】

体験後の感想などあまり反応がないのもそうですが、今回の体験は楽しんで防災に興味を持つきっかけを作るのがねらだったので、果たして地域に直接貢献できたかは、正直感じづらいなと思った。（「自分との関わり」**やや**→**やや** / 「地域に貢献」**やや**→**あまり**）

実社会と連携し直接的な関わりがあったとしても、**相手からの反応やコメント等が十分にもらえなかった場合**（ex. チラシ配布のみ）、地域貢献の実感はつかみにくい可能性

私たちは防災プロジェクトを実行したが、それをどう地域に伝わって実行されるかは市や県の人考えるので、自分が貢献しているという実感はなかった。今よりもっと自分の地域を知って、課題をしぼりたいと思った。（「自分との関わり」**やや**→**よく** / 「地域に貢献」**やや**→**あまり**）

「地域の課題解決に向けた**取り組みや政治はやはり行政が行うもので**、高校生が貢献できるものではない」と諦念・失望する生徒も若干存在。
→体験は主体的態度形成にマイナスに働く可能性も

実際に津波が来ると言われたら、結局自分しか考えられなくて、他人を助けるなんて無理だと思う。南区のことは市の職員がどうにかしてくれると思うし、僕らが声を上げたって大人はたいして聞いてくれないと思う。（「自分との関わり」**やや**→**あまり** / 「地域に貢献」**やや**→**あまり**）

市の職員の方からコメントを貰って、自分たちが考えた案を実行するには、自分たちの思いだけでは実行できなくて、県や市の職員の人たちにも考えがあるんだなと感じた。（「自分との関わり」**やや**→**よく** / 「地域に貢献」**やや**→**よく**）

上と同じく、解決できないと自らの非力を嘆く感想。しかしアンケート回答のプラス変化からは、**体験（市職員に対する政策発表）を通して、「課題解決とは何か？」の認識が深まり**、主体的態度が向上したという解釈も可能か

【今後に向けての課題点】

- ① 地域の方と直接的に関わる機会が単元末の1回（発信・発表）のみだと、自らが地域に貢献できているか、実感として掴みにくいのでは & 連携する地域の方にとっても、生徒の様子や変容が把握しにくいのでは
⇒単元の途中でも交流する機会を設け、双方に意見交換するなど、継続的に関わる仕方を模索すべき
- ② 「地域の目線に立って考える」とはどのようなアプローチなのか、体系・理論的な説明が難しく、よって「地域の目線に立てている」かを評価する明確な基準が設定できていない ⇒先行研究等を調べ、さらに研究を進めたい

本研究のまとめ と 今後の取り組み

- 本研究は、地域課題に対する認識形成や解決策を考え提案する力の育成に寄与するだけでなく（成果①）、実社会と直接的に関わり発表・発信することで主体的態度の形成にも一定の成果が確認された（成果②③）

※主体的態度の形成は、地域課題を自己に関わるものと捉える意識を土台に、自己効力感を高めることで実現

6つの方法・ポイント
を取り入れた単元開発
→主体的態度の形成へ

①地域の課題を発見
(資料をもとに課題点を自ら見出す)

②地域の目線に立つ
(地域のニーズ等を調べ伝え方を工夫)

③自らテーマを設定
(関心に即してジャンルや探究テーマを設定)

④他者から評価される
(地域・行政の方からプラスの評価を貰う)

⑤探究の方法を習得
(持続性を問う5観点を策の改善に活用)

⑥地域と直接関わり発表
(地域の他者に成果を伝え達成感を得る)

- 『公共』での実施を想定して、項目Aの概念（幸福・公正など）を活用し、大項目C「持続可能な社会づくりの主体となる私たち」で行う、実社会との接点を重視した課題解決型学習（約14時間）のモデル化をはかった

課題点：①授業時数の確保 / ②実社会と連携する体制づくり / ③発表・発信する成果物を作る技能指導

対策

- ICTを活用し調査・共有の効率化
(Google スライド・ドライブ等の活用)
- LHRや総合的探究の時間も活用
(導入や相互評価会など学年全体で実施する)

- 管理職・同教科の教職員などと協力して、連携先と連絡・交渉をする校内体制作り
- 連携先と連携目的を共有し、生徒発表へのコメントや翌年度の協力等をお願いする

- 商業科や情報科、国語科など他教科との連携により技能向上を図る
- 年度を跨いで基礎的な知識・技能を習得
(本校の場合…2年生「社会と情報」でICT活用技能を、「地理A」や防災講話で基礎知識を学習)

- 今後は、①『公共』項目Bの学習内容を、課題解決型学習プログラムにどう活用できるかを検討したい。
- ②「地域や社会に貢献する」の「貢献」とは何なのか&主権者教育・政治参加との関係性を探究したい。
- ③他地域で異なるテーマ (ex.過疎化) でも、同様のプログラムを開発し成果・課題を検証できるか試したい。